

- 35 「寂しく 絶望のうちにひっそりと
身を横たえて死ぬのです
エドウィンは わたしのためにそうしました
今度は わたしが彼のためにそうします」
- 36 「ああ それはならぬ」 と隠者は叫んで
彼女を強く抱きしめた
驚いた娘が 咎めるように振り向くと
抱きしめたのは エドウィンその人だった
- 37 「よく見てごらん 愛するアンジェリーナ
わたしを魅惑した人 さあ よくごらん
長いこと行方不明のあなたのエドウィンが こうしてここに
愛するあなたのところに戻ってきたのです
- 38 「だから あなたをしっかりと胸に抱き寄せ
悲しみは もうすべて忘れよう
二人は 二度と決して別れることはないのです
あなたはわたしの命 わたしだけのもの
- 39 「これからさきは 二度と別れることはなく
死ぬまで 心から愛しあうのです
あなたの堅い心が 悲しみに引き裂かれると
あなたのエドウィンの心も 張り裂けてしまいます」

- 28 「次から次と 遺産をねらうものたちが
豪華な贈り物で張り合います
なかで 若いエドウィンもわたしに心を寄せる一人でしたが
でも彼は 決して恋は口にしません
- 29 「貧しい質素な身なりで
財産も権力もありません
知恵と美徳が 彼のすべてです
でもわたしには 本当はそれだけで充分でした
- 30 「朝日とともに花咲く花も
きらめく夜明けの露も
純粹さの証^{あか}しとしては何ものも
彼の心には かなわなかったはず
- 31 「きらめく露も 樹^きに咲く花も
その美しさは つかの間の輝き
エドウィンの美しさが ああ わたしには露と花の美しさ
そのつかの間が わたしの操だったのです
- 32 「というのは わたしはいつまでも浮気な手管で
うぬぼれて しつこく彼をからかいました
彼の情熱に心を動かされながら
苦しむ彼を見ては 勝ち誇るのです
- 33 「ついに わたしの軽蔑に絶望して
驕るわたしから去ってゆきました
失恋の孤独を求め
ひっそりと 死んでいったのです
- 34 「悲しみは すべて わたしのせい
わたしは 生涯かけて償うのです
彼が求めた孤独を わたしも求め
彼が横たわるところに わたしも横たわるのです

- 21 「お人好しの若者よ 悲しみなんか黙らせて
女のことなど 追いはらってしまうがよい」
ところが 隠者が話しているうちに
恋やつれた客人の顔が赤らんできた
- 22 驚いたことに 今までなかった美しさが立ちのぼり
またたく間に 客人の顔一面に広がった
夜明けの空に広がる朝焼けのように
つかの間の光り輝く美しさ
- 23 恥じらいにみちた表情 波打つ胸が
代わる代わる 驚きの波紋を広げるうちに
まぎれもなく 客人の正体は露れて
そこに立っているのは 見るも美しい娘であった
- 24 「ああ 失礼な身なりをお許してください
哀れな寄る辺なき身をお許してください
穢れた草鞋で
あなた様の清らかな場所に踏み込んでしまいました
- 25 「でもどうか 娘を憐れみください
愛に導かれて こうしてさまよっています
やすらぎを求めながら 見いだすものは
絶望という名の道連ればかり
- 26 「わたしの父は タイン川沿いに住む
裕福な領主でした
財産はすべて わたしが継ぐと決まっていた
子供はわたしだけだったからです
- 27 「父のやさしい両腕からわたしを勝ちとるために
たくさんの求婚者がやってきました
みんな わたしの美しさをほめ称え
恋の炎を燃やし あるいは そのふりをしました

- 14 子猫は お客があるので嬉しげに
二人のまわりをぐるぐるまわっていたずら遊び
コオロギが 暖炉の中でコロコロ鳴いて
薪が パチパチはじけて火の粉を散らす
- 15 しかし どんなに心のこもった待遇^{もてなし}も
客人の愁いを慰めることはかなわず
悲しみに重く胸をふさがれて
若者は 涙を流しはじめた
- 16 突き上げる悲しみ事に気付いた隠者は
同情に心痛めて
「かわいそうな若者よ いったい
そなたの胸の痛みは どういうわけで？」
- 17 「幸せな故郷を追われて
心ならずの流浪の旅か？
裏切られた友情を悲しんで？
それとも 振り向かれない恋の悲しみ？」
- 18 「ああ 幸運がもたらすよろこびなんて
取るに足らず 朽ちゆくもの
くだらぬものを尊ぶ者は
くだらぬものより もっとくだらぬ存在^{もの}
- 19 「友情なんて名ばかりのもの
人を騙してまどろます魔法の力
富や名声にしのび寄り
結局は 悲しみに終わる実体のない影
- 20 「恋は さらにむなしく響くこだま
近頃の美女^{おんな}の 弄ぶもの
この世に姿は見せず 見えてもせいぜい
コキジバトの巣を暖める姿

- 7 「しかし 草茂る山腹からは
罪にならないごちそうをいただいでくる
小袋いっぱい 草や木の実をちぎり
水は泉からいただくのじゃ
- 8 「されば さあ巡礼者よ 気兼ねはいらぬ
この世の気づかいは すべて無用のこと
御天道様おてんとさまのもとで 人は十分に恵まれ
そのわずかなる恵みを 永く待たされることはない」
- 9 天から落ちる柔らかいしずく雫のように
隠者のやさしい声が伝わる
見知らぬ若者は 遠慮がちにうつ向きながら
隠者について 小屋にむかった
- 10 はるか先の暗い森の中に
隠者の小屋は ひっそりと建っていた
そこは 辺りの貧しいものたちや
道に迷った旅人をかくまうやすらぎの場所
- 11 小さなわらぶき屋根の小屋の中は
盗まれるを気づかうものはなにもなく
掛け金を下ろしただけのくぐり戸を開け
盗人ならぬ二人は中に入った
- 12 ひねもす働いた村人たちが
疲れたからだを横たえる時刻とき
隠者は 小さな暖炉の火を起こし
物思わしげな客人を暖めた
- 13 貯えの野菜を惣菜そうざいに
さあ召し上がれ とにっこりうながし
昔話を話たくみに語って聞かせ
秋の夜長をもてなした

エドウィンとアンジェリーナ²⁰⁾ (試訳)

- 1 「もし 谷間のやさしい隠者様
人跡まれな道を ご案内下さい
むこうにかすかに見える明かりが
暖かく谷を照らすところまで行くはずなのが
- 2 「ここで 心細くも道に迷ってしまいました
足はふらふら 進みません
森は限りなくひろがり
進めば進むほど むこうにのびてゆく気がします」
- 3 「若者よ」と隠者は言った
「危険な暗がりを行くのはおよしなさい
むこうにちらちら見える明かりは きつね火で
そなたをおびき寄せて 死の谷へ落とそうとするもの
- 4 「身を寄せる宿の無いものには
わたしの戸口は いつでも開けてある
食物はろくにも無いが
よろこんで供しよう
- 5 「さあ 今宵は遠慮なく
わたしの小屋にあるものを楽しまれるがよい
イグサの寝床と 貧しい食事と
わたしの祝福と 眠りだけじゃが
- 6 「谷あいのにのんびり遊ぶ羊どもに
手をかけることは決してしない
憐れみをいただく神様のお教えで
そのものどもには憐れみを施す考え

20) The text of the 2nd edn (May 1766) of *Vicar*, from *The Poems of Gray, Collins, and Goldsmith*.

ゴールドスミスは、ここで、牧師の言葉に託して、当時の詩の感傷性を鋭く皮肉っているのである。

華美な形容辞ばかりで中身のない当時の詩に対して、簡素な言葉でしっかりとした物語性を持っている点に、ゴールドスミスがバラッドに惹かれた最大の理由があって、感傷に満ちた歌が大いに受けるだろうことを十分に計算づくで、彼は元歌の模倣とそれからの逸脱を少々楽しんでみたのかも知れない。もしそうだとすれば、当時の読者に対して‘a sentimental donkey’という言葉は吐けても、ゴールドスミス自身に対してはこの言葉は保留せねばなるまい¹⁹⁾。

19) Cf. "...one can perceive in Goldsmith the broad deep current that is leading to Romanticism. He has many of the inner feelings of which the new literature will be made up; he has even the retrospective trend of sensibility and imagination. Not only does he extol the moral purity of simple folks, but he finds pleasure in describing the archaic traits of peasant customs, exalts the touching beauty of the old popular ballads, which Percy had just brought back into vogue. He can intuitively discern what is dying and withering in the poetry of his time, and calls for a rejuvenation of form through the suppression of the well-worn epithet." (Émile Legouis & Louis Cazamian, *A History of English Literature*, rev. ed., London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1971, p.852)

いとして、それでは作家ゴールドスミスを ‘a sentimental donkey’ と罵倒できるかどうか。この点については、判断を保留したい気持ちが残る。確かに小説 *The Vicar of Wakefield* そのものも、波瀾万丈の曲折の末めでたくハッピーエンドに終わる作品であるが、この中には ‘An Elegy on the Death of a Mad Dog’¹⁶⁾ という彼の今ひとつの有名なバラッド詩が含まれている。信心深い男が一匹の犬を飼っており、その犬と男は、はじめ仲の良い友達だったが、ある時犬はかっとなって男に噛みつく。

The wound it seemed both sore and sad 25
 To every Christian eye;
 And while they swore the dog was mad,
 They swore the man would die.

But soon a wonder came to light,
 That showed the rogues they lied: 30
 The man recovered of the bite,
 The dog it was that died.

1760年の夏ロンドンが野犬の恐怖に襲われたことがあり、この歌はそれにヒントをえたもの。しかし表題の「哀歌」とは、当時の感傷に満ちた哀歌調の詩に対する鋭い諷刺になっている。すなわち、牧師の末の息子 Bill がこの歌を家族の前でうたい終わると、皆んなはビルのうまさをほめ称える。牧師は ‘A very good boy, Bill, upon my word, and an elegy that may truly be called tragical.’¹⁷⁾ と言い、ついで次のようなことを言う。

“the most vulgar ballad of them all generally pleases me better than the fine modern odes, and things that petrify us in a single stanza; productions that we at once detest and praise.... The great fault of these elegiasts is, that they are in despair for griefs that give the sensible part of mankind very little pain. A lady loses her muff, her fan, or her lap-dog, and so the silly poet runs home to versify the disaster.”¹⁸⁾

16) 拙訳『狂犬の死に寄せる哀歌』（前出『バラッド詩集』収録）参照。

17) *The Vicar of Wakefield*, in *The Miscellaneous Works*, I, 89.

18) *Ibid.*, pp.89-90.

Now farewell grief, and welcome joy

105

Once more unto my heart;

For since I have found thee, lovely youth,

We never more will part.

(*Reliques*, I, 245–246)

パーシーは *Reliques* の3版 (1775) で、‘Edwin and Angelina’の方が‘The Friar of Orders Gray’よりも先に書かれたと認め、しかし実はどちらも古いバラッド‘Gentle Herdsman’を元歌としていた、と明言する¹⁴⁾。

元歌と違う両者の共通点は、メロドラマ的な再会の一点である。モームの登場人物が空想した‘Edwin’と‘Angelina’の身の上話は、正にこのゴールドスマスの(そしてパーシーの)、元歌にない創作から生まれたものである。ランドン判事が、そのような空想をしたグレイを“a sentimental donkey”と言ったように、そして勿論、あのような話の結末によって、作者モームにとっても、そのような「完全な幸せ」はありえないこと、それは、リアリティの欠けた「感傷」以外の何物でもないように、ゴールドスマスやパーシーの作品には、伝承バラッドから伝わってくる人生のリアリティの迫力が誠に希薄であると認めざるをえない。このような作品が当時大いに受けていたとすれば、「われわれの時代ほど、真実の感情に欠け、誇張された偽りの感情にあふれた感傷的な時代はない」というロレンスの言葉は、「理性の時代」といわれた18世紀のあの時代にもそっくり当てはまってしまうのではないかという気がしてくる。‘Edwin and Angelina’をもってしてだけでなく、当時の‘literary ballads’や流行の‘broadside ballads’がそのことを証明しているように思えるのである。(なお付け加えれば、グレイの空想は、‘Edwin and Angelina’だけでなく、貧しくて結婚できないから男が遠くに出稼ぎに行き、いつまでも帰って来ないという点、例えば伝承バラッドの‘The Daemon Lover’ (Child 243)を容易に思い起こさせるであろう。しかし伝承バラッドでは、成功を収めて帰ってきたかに思えたかつての恋人は、その正体は悪魔であって、愛の再会のよろこびはこっぴ微塵に打ち砕かれるのであった¹⁵⁾。伝承バラッドでは、メロドラマ的な再会はどこまでもなじまないのである。)

さて最後に、以上のように、作品‘Edwin and Angelina’の感傷性は免れな

14) *Reliques*, I, 246.

15) 拙著『バラッド鑑賞』, 開文社, 1988年, pp.147–158 参照。

で、彼の作品がパーシーの 'The Friar of Orders Gray'¹²⁾ (1765) の剽窃だ
という告発を受け、それに反論して、同紙上 (7月23~25日) で次のように述
べている。

“Another Correspondent of yours accuses me of having taken a
Ballad. I published some Time ago from one by the ingenious Mr.
Percy. I do not think there is any great Resemblance between the two
Pieces in Question. If there be any, his Ballad is taken from mine.
I read it to Mr. Percy some Years ago, and he (as we both considered
these Things as Trifles at best) told me, with his usual Good Humour,
the next time I saw him, that he had taken my Plan to form the
Fragments of Shakespear into a Ballad of his own. He then read me
his little Cento, if I may so call it, and I highly approved it.”¹³⁾

'The Friar of Orders Gray' では、巡礼の衣をまとった美しい女性が、途中托
鉢修道僧に出逢い、昔の恋人を探していると打ち明ける。修道僧は、そのたず
ね人はもう死んで墓の中、いつまでも嘆き悲しむのはおやめなさい、と諭すが、
取りかえしのつかない後悔を繰り返す女に、最後に修道僧が自分の正体を打ち
明ける、という筋書きである。

Yet stay, fair lady, turn again,
And dry those pearly tears;
For see beneath this gown of gray 95
Thy owne true-love appears.

Here forc'd by grief, and hopeless love,
These holy weeds I sought;
And here amid these lonely walls
To end my days I thought. 100

.....

12) 拙訳「フランススコ修道僧」(『バラッド詩集—イングランド・スコットランド民
衆の歌』, 音羽書房, 1978年収録) 参照。

13) *The Poems of Gray, Collins, and Goldsmith*, p.596.

Now, gentle heardsman, aske no more,
 But keepe my secretts I thee pray;
 Unto the towne of Walsingham 55
 Show me the right and readye way.

“Now goe thy wayes, and God before!
 For he must ever guide thee still:
 Turne downe that dale, the right hand path,
 And soe, faire pilgrim, fare thee well!”⁹⁾ 60

ノーフォークのウォルスィンガムに祭られている聖母マリア像は、カンタベリーのトマス・ベケットの墓以上に多くの人々が巡礼するところであり、ヘンリー三世（1207-72；在位1216-72）以来歴代国王も巡礼したという¹⁰⁾。若者が羊飼いにウォルスィンガムへの道をたずね、男の身なりをしているが実は女で、かつてつれなくした恋人への罪を詫びて巡礼しているという事情を明かすところまでは、ゴールドスミスがそっくり取り入れている。違うのは、それぞれの歌の結末である。元歌では、すべての話を聞いて最後に羊飼いは「それでは気をつけて行かれるがよい、ごきげんよう」と言って別れる。一方ゴールドスミスの方では、女の身の上話を聞いていた森の隠者こそ、なにを隠そう、かつて女につれなくされてこの世を捨てた、そしてもうてっきり死んだものと思われていた、かつての恋人エドウィンその人だったということになる。多言を要しないだろう。これは余りにも劇的な再会のドラマである。*Reliques*の編者ウィートリー（Henry B. Wheatley）は、“Goldsmith did not follow the last two verses, but made his ending *much more sentimental* than that of the old ballad.”¹¹⁾ (*italics mine*) と注しているが、いかにもこのように話が終わっては出来過ぎてくる。

ゴールドスミスは当時、*St. James's Chronicle* 紙上（1767年7月18～21日）

9) From Thomas Percy, ed., *Reliques of Ancient English Poetry*, ed. Henry B. Wheatley, Vol. II, New York: Dover Publications, Inc., 1966.

See Percy's note to the ballad: “This poem is printed from a copy in the Editor's folio MS. which had greatly suffered by the hand of time; but vestiges of several of the lines remaining, some conjectural supplements have been attempted, which, for greater exactness, are in this one ballad distinguished by italicks.” (*Ibid.*, p.87)

10) *Reliques*, II, 87.

11) *Reliques*, II, 91.

For my beloved, and well-beloved, 25
My wayward cruelty could kill:
And though my teares will nought avail,
Most dearely I bewail him still.

He was the flower of noble wights,
None ever more sincere colde bee; 30
Of comely mien and shape hee was,
And tenderlye hee loved mee.

When thus I saw he loved me well,
I grewe so proud his paine to see,
That I, who did not know myselfe, 35
Thought scorne of such a youth as hee.

And grew soe coy and nice to please,
As women's lookes are often soe,
He might not kisse, nor hand forsooth,
Unlesse I willed him soe to doe. 40

Thus being wearyed with delayes
To see I pittyed not his greeffe,
He gott him to a secrett place,
And there he dyed without releeffe.

And for his sake these weeds I weare, 45
And sacrificce my tender age;
And every day Ile begg my bread,
To undergoe this pilgrimage.

Thus every day I fast and pray,
And ever will doe till I dye; 50
And gett me to some secrett place,
For soe did hee, and soe will I.

Gentle heardsman, tell to me,
Of curtesy I thee pray,
Unto the towne of Walsingham
Which is the right and ready way.

“Unto the towne of Walsingham 5
The way is hard for to be gon;
And verry crooked are those pathes
For you to find out all alone.”

Weere the miles doubled thrise,
And the way never soe ill, 10
Itt were not enough for mine offence;
Itt is soe grievous and soe ill.

“Thy yeeares are young, thy face is faire,
Thy witts are weake, thy thoughts are greene;
Time hath not given thee leave, as yett, 15
For to committ so great a sinne.”

Yes, heardsman, yes, soe woldest thou say,
If thou knewest soe much as I;
My witts, and thoughts, and all the rest,
Have well deserved for to dye. 20

I am not what I seeme to bee,
My clothes and sexe doe differ farr:
I am a woman, woe is me!
Born to greeffe and irksome care.

pleasing of any in our language, versified with inimitable beauty, and breathing the very soul of love and sentiment.” By 1790, Vicesimus Knox (*Winter Evenings: or, Lucubrations on Life and Letters*, 2nd edn, i 447) could call it “one of the most popular pieces in the language; perhaps it stands next in the favour of the people to Gray’s delightful Elegy.” (Roger Lonsdale, ed., *The Poems of Gray, Collins, and Goldsmith*, London: Longmans, Green and Co. Ltd., 1969, p.598)

示す例であるが、場面は海の精ガラティアが恋人アキスの腕に抱かれているとき、ガラティアに恋して報われない一つ目の巨人 Polyphemus のうたう恋の歌である。

O Galatea, whiter than the petals of the snowy columbine, a sweeter flower than any in the meadows, more tall and stately than the alder, more radiant than crystal, you are more playful than the tender kid, smoother than shells continually polished by the sea, more delightful than sun in winter or shade in summer, more choice than apples, lovelier to see than tall plane trees, more sparkling than ice, sweeter than ripe grapes, softer than swansdown or creamy cheese and did you not flee from me, fairer than a well watered garden.

Yet, O Galatea, you are at the same time wilder than an unbroken heifer, harder than aged oak, more treacherous than the sea, tougher than willow twigs or white vines, more immovable than these rocks, more turbulent than a river, prouder than the much-praised peacocks, fiercer than fire, harsher than harrows, grimmer than a mother bear, deafier than ocean, more pitiless than a trampled snake. Above all, and this is what I would chiefly wish to change, you flee, not just more swiftly than a stag, driven on its way by shrill-barking hounds, but swifter even than the winds, and the fleeting breezes.⁷⁾

ゴールドスミス の 作品 (試訳後出: テキストは紙面の都合で省略) が、バーチェル氏の言うように華美なイメージ、形容辞を排して豊かなプロットを展開していることは認めよう。しかも、この作品は当時絶賛を博している⁸⁾。しかし、実はこの作品には元歌があった。パーシーの *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) に収められた 'Gentle Herdsman, Tell to Me' (Vol. II, Bk. 1, XIV) である。

7) Ovid, *The Metamorphoses*, tr. Mary M. Innes, Penguin Books, 1955, p. 306.

このあとガラティアとアキスは巨人に見つかりアキスは彼に殺されるが、ガラティアはアキスから流れ出た血を河に変えた。なお、ゲイはヘンデル (George Frederick Handel, 1685-1759) の歌劇 'Acis and Galatea' (1732) のリグレット (台本) を書いている。

8) Cf. 'G.'s ballad was singled out for the "warmest praise" by the reviewer of *Vicar* in the *Critical Review* xxi (June 1766) 440: "It is an exquisite little piece, written in that measure which is perhaps the most

である。

さて、グレイが空想した、いや、モームが創作した「エドウィンとアンジェリーナ」の下敷きとしてゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1730?-1774) の 'Edwin and Angelina' (written by Feb. 1764, perhaps as early as 1761) が意識されていることは疑う余地はないだろう。小説 *The Vicar of Wakefield* (written 1761-2, pub. 1766) の第8章で Mr. Burchell が紹介するという形で書かれている。バーチェル氏は、牧師の次女 Sophia に好意を寄せて一家をよく訪ねてくる。場面は、戸外での昼食のあとの団欒のひと時である。ソフィアが、互いの腕に抱かれたまま雷に打たれて死んだ恋人のことを書いたゲイ (John Gay, 1688-1732) の描写にとっても心を打たれるものがあると言い、それに対して弟の Moses が、オヴィッド (Ovid, 43 B.C.-? A.D. 17) の Acis と Galatea の描写には及ばない、ローマの詩人は対照法 ('the use of contrast') をよく心得ており、人の心を動かす力はいかに巧みにその方法を駆使するかにかかっている、と述べる。二人のやりとりを聴いていたバーチェル氏は、次のように言って彼の詩に対する考え方を主張する。

"It is remarkable," cried Mr. Burchell, "that both the poets you mention have equally contributed to introduce a false taste into their respective countries, by loading all their lines with epithet. Men of little genius found them most easily imitated in their defects, and English poetry, like that in the latter empire of Rome, is nothing at present but a combination of luxuriant images, without plot or connexion; a string of epithets that improve the sound, without carrying on the sense.... I have made this remark only to have an opportunity of introducing to the company a ballad, which, whatever be its other defects, is, I think, at least free from those I have mentioned."⁶⁾

このようにして紹介された作品が 'Edwin and Angelina' であるが、このバラッドがゴールドスミスの作品であるようにバーチェル氏の英詩に対する批判は作者自身のものと考えられよう。話の展開が無くて華美な形容辞の羅列だという例を、オヴィッドから引いてみよう。モーゼスが言う対照法をよく

6) *The Vicar of Wakefield*, in *The Miscellaneous Works of Oliver Goldsmith*, A New Edition in Four Volumes, Vol.I, London, 1821, p.36.

話である。——‘Miss Wingford’は裕福な独身の老婦人で、‘Miss Starling’という女性と一緒に暮らしていた。とても健康だったのに、或る日突然死ぬ。遺産のすべて（6～7万ポンド）は遺言によってスターリングの手に渡る。30年間仕えていた女中が、自分も遺産をもらえる約束だったと騒ぎ出し、ウイングフォードさんは毒殺されたと言いふらす。ホームドクターの‘Dr Brandon’は、ウイングフォードさんはかねて心臓が悪く、長年治療を続けてきており、死因に不信な点はなかった、と証言。しかし、あまりにも女中が騒ぎたてるので、ついに警察が動き、墓を暴いて検死が行われた結果、バルビタール（催眠剤）の過量投与による死であることが判明。ウイングフォードさんは夜寝る前にココアを飲む習慣で、それをいつも準備するのがスターリングの役目であったことから、彼女は逮捕される。更にスターリングとドクター・ブランドンが親密な関係にあったという噂がもっぱらで、結局二人は共犯してウイングフォードさんを殺害したとして裁判になる。二人は、友達以上の関係にはなかったと反論、医学検証の結果、スターリングは、‘virgo intacta’（法律用語：触れられざる処女、完全な処女）であった。ドクター・ブランドンは、不眠を訴えるウイングフォードさんにバルビタールは与えたが、一錠以上決して服用しないように注意していたこと、従って、偶然の事故か、または自殺ではないかと弁護。自殺の要素はまったく考えられず、ランドン判事は殺害を確信したが、陪審員の判決は「無罪」となる。次の引用文は最後のくだりである。

‘What do you think made the jury find them not guilty?’

‘I’ve asked myself that; and do you know the only explanation I can give? The fact that it was conclusively proved that they had never been lovers. And if you come to think of it, that’s one of the most curious features of the whole case. That woman was prepared to commit murder to get the man she loved, but she wasn’t prepared to have an illicit love-affair with him.

‘Human nature is very odd, isn’t it?’

‘Very’ said Landon, helping himself to another glass of brandy.⁵⁾

愛する男のために殺人を犯す用意はあっても、不義の情事を交わす用意はなかった、というところに人間というものの不思議さを感じるかどうかは別として、ともかく、かつてのドクター・ブランドンとスターリングこそ今のクレイグ夫妻、グレイが空想した‘Edwin’と‘Angelina’の真の姿であった、というわけ

5) *Ibid.*, pp.246-247.

merciful interposition of providence, Angelina's mother chose that very moment to abandon a world in which she had made herself a thorough nuisance. But when after so long a separation they met, Angelina saw with dismay that Edwin was as young as ever. It's true his hair was grey, but it infinitely became him. He had always been good-looking, but now he was a very handsome man in the flower of his age. She felt as old as the hills. She was conscious of her narrowness, her terrible provincialism, compared with the breadth he had acquired by his long sojourn in foreign countries. He was gay and breezy as of old, but her spirit was crushed. The bitterness of life had warped her soul. It seemed monstrous to bind that alert and active man to her by a promise twenty years old, and she offered him his release. He went deathly pale.

'Don't you care for me any more?' he cried brokenly.

And she realized on a sudden—oh, the rapture, oh, the relief!—that to him she was just the same as she had ever been. He had thought of her always as she was; her portrait had been, as it were, stamped on his heart, so that now, when the real woman stood before him, she was to him, still eighteen.

So they were married.

'I don't believe a word of it,' I said when Miss Gray had brought her story to its happy ending.³⁾

バラッドの流れを上流に遡る前に、モームの話の結末を。招かれた時間に少し遅れてやって来たクレイグ夫妻を見た瞬間、ランドン判事は、はっと気付くものがあった。夫妻の方も一瞬たじろぎをみせるが、あとはどちらの側も何も言わず、食事と当たり障りのない会話が進む。しかし、途中で夫の方が急に気を失って倒れる。まもなく意識は戻って、夫妻はそそくさと帰ってゆく。あとで、クレイグ夫妻に対するグレイの「エドウィンとアンジェリーナ」の物語を「私」がランドンに語って聴かせると、無表情に聴いていた彼は、“I'm afraid your friend Miss Gray is a sentimental donkey, my dear fellow.”⁴⁾ と言う。翌日の昼、グレイから電話がかかり、クレイグ夫妻が昨夜の内に姿を消したという。あとはランドン判事が「私」に語った「ウイングフォード殺人事件」の

3) *Ibid.*, pp.238-239.

4) *Ibid.*, p.243.

with one another years before—perhaps twenty years—when Angelina, a young girl then, had the fresh grace of her teens and Edwin was a brave youth setting out joyously on the journey of life. And since the gods, who are said to look upon young love with kindness, nevertheless do not bother their heads with practical matters, neither Edwin nor Angelina had a penny. It was impossible for them to marry, but they had courage, hope, and confidence. Edwin made up his mind to go out to South America or Malaya or where you like, make his fortune and return to marry the girl who had patiently waited for him. It couldn't take more than two or three years, five at the utmost; and what is that, when you're twenty and the whole of life is before you? Meanwhile of course Angelina would live with her widowed mother.

But things didn't pan out according to schedule. Edwin found it more difficult than he had expected to make a fortune; in fact, he found it hard to earn enough money to keep body and soul together, and only Angelina's love and her tender letters gave him the heart to continue the struggle. At the end of five years he was not much better off than when he started. Angelina would willingly have joined him and shared his poverty, but it was impossible for her to leave her mother, bed-ridden as she was, poor thing, and there was nothing for them to do but have patience. And so the years passed slowly, and Edwin's hair grew grey, and Angelina became grim and haggard. Hers was the harder lot, for she could do nothing but wait. The cruel glass showed such charms as she had possessed slipping away from her one by one; and at last she discovered that youth, with a mocking laugh and a pirouette, had left her for good. Her sweetness turned sour from long tending of a querulous invalid; her mind was narrowed by the society of the small town in which she lived. Her friends married and had children, but she remained a prisoner to duty.

She wondered if Edwin still loved her. She wondered if he would ever come back. She often despaired. Ten years went by, and fifteen, and twenty. Then Edwin wrote to say that his affairs were settled, and he had made enough money for them to live upon in comfort, and if she were still willing to marry him, he would return at once. By a

伝承バラッドの変奏した姿がクラシック音楽の中にまで見い出せることは大いなる愉快であるが、今回はモーム (William Somerset Maugham, 1874-1965) の或る短編小説中のエピソードから、バラッドの変奏した姿を逆にたどってその源まで遡り、それによって、18世紀の「バラッド詩」(literary ballad) のひとつの性質を浮き彫りにしてみようというねらいである。

モームという短編小説の名手が手掛けた数多くの作品のひとつに *The Happy Couple* がある。今はもう60才を過ぎた Landon 判事が休暇でイタリアに向かう途中、古くからの知り合いである「私」(語り手)のところに2, 3日滞在することになる。「私」には 'Miss Gray' という数マイル離れたところに住む友達があり、ランドン判事の到着の夜、グレイを招いて一緒に食事をする。翌日は「私」とランドン判事がグレイの家に招かれる。その昼食にグレイは、隣に住む Craig 夫妻を招くことにする。最近引っ越してきた夫婦で、夫の方は、赤ら顔でふさふさとした白髪のなかなか美貌の初老風である。妻の方は、背が高く、いくぶん男性的な硬い感じの顔付きで、鼻も大きく、日焼けした膚、陰気な雰囲気のある40女に見える。二人にはまだ1才の誕生日を迎えていないような赤ん坊があり、いかにも仲睦まじく腕を組んでよく庭を散歩したりする。そのような時二人はひと言も言葉を交わさないのだが、それは、一緒にいるだけでこの上もなく幸せで、会話を必要としないのだ、という風にグレイには見えるのだった。この夫婦の様子を聞かされた「私」は、「完全な幸せ」('complete happiness')²⁾なんてこの世にめったにあるものではないが、その二人にはいかにもそれがあって幸せそうで、結婚していないグレイにはとても羨ましく映るのだろう、と思う。あまり近所付き合いを好まない風で、実は今までグレイは、道端ですれ違ったりすることはあっても二人と一度も口をきいたことがない。だから、彼らの 'first names' も知らないのである。彼らに対するグレイの空想は高まる。バラッドを愛する人たちのために、そして、モームの 'storyteller' としての見事な手法をのちほど大いに楽しむために、多少長くなるが次の原文を引用しよう。

Because she didn't know what their first names were, she called them Edwin and Angelina. She made up a story about them. She told it to me one day; and when I ridiculed it, she was quite short with me. This, as far as I can remember, is how it went: They had fallen in love

2) W. S. Maugham, *Collected Short Stories*, Vol.I, Penguin Books, 1977, p.238.

Edwin and Angelina の感傷性

山 中 光 義

“Never was an age more sentimental, more devoid of real feeling, more exaggerated in false feeling, than our own. Sentimentality and counterfeit feeling have become a sort of game, everybody trying to outdo his neighbour.” (From D. H. Lawrence, ‘A Propos of Lady Chatterley’s Lover’)

マザーグースが新聞の見出しや推理小説の題名に登場してただちにその出典を理解されるくらいに英語文化に浸透していて楽しいとすれば、バラッドも様々な分野に顔を出してわれわれを大いに楽しませてくれる。Joan Baez や Steeleye Span らによって歌われていると知っても今更あまり驚くものはいないかも知れないが、ブラームス (Johannes Brahms, 1833-1897) に『エドワード』という作品があると知って新鮮な驚きと愉快的気持ちをいただくのはわたしだけだろうか。

ブラームスは「バラッド」を5曲書いている。作品10の4曲と作品118の第3番である。バラッド第1番ニ短調作品10の1にのみ「エドワード」という題名が付けられたが、楽譜の冒頭に「ヘルダーの『諸民族の声』の中のスコットランドのバラッド『エドワード』による」と記されている。ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1774-1803) の *Stimmen der Völker in Liedern* (Voices of Nations in Songs 1778-79) には T. Percy の *Reliques of Ancient English Poetry* からの22篇を含むイギリスの歌謡60篇が収められている¹⁾。言うまでもなく *Edward* (Child 13B) は母親の指示で父親を殺した息子の物語として余りにも有名であるが、アンダンテ、ニ短調、4/4拍子の冒頭旋律には『エドワード』の詩がそのままの歌詞として当てはめられるという。アレグロ、二長調となる中間部は、恐ろしさが重厚な響きで表わされる。

1) 原 一郎『バラッド研究序説』、南雲堂、1975年、pp.103-107 参照。